

初期新高ドイツ語における動詞接頭辞の 統語的作用について

Zur syntaktischen Wirkung der frühneuhochdeutschen Verbalpräfixe

大 島 浩 英

OSHIMA Hirohide

I. はじめに

ドイツ語の動詞接頭辞には、基礎動詞の意味、動作態様 (Aktionsart) に対する完了化作用と、さらに統語関係に与える影響が考えられる。例えば *über das Volk herrschen* → *ein Volk beherrschen* (民衆を統治する) のように接頭辞 *be-* の付加により前置詞格目的語が対格目的語に変換されるという現象が現代語には見られるが、こういった格関係は初期新高ドイツ語と現代語とでは必ずしも同じではなかった。初期新高ドイツ語においてよく現れる目的語の格は属格であるが、現代語において属格目的語はかなり衰退し、*bedürfen*, *entbehren*, *ermangeln* などの動詞と結合して欠如的な意味を表したり¹⁾、あるいは古風な表現としてわずかに残っているに過ぎない²⁾。そこで本稿では、初期新高ドイツ語における属格目的語をとる接頭辞動詞について、それらの属格目的語が現代語においてはどのように変化したのかを調べながら、その変化に対する接頭辞の影響を考察してゆくことにする。

II. 属格目的語の変化

ここでは、初期新高ドイツ語で書かれた民衆本 *Das Lalebuch*³⁾ を考察の対象とし、この文献に現れた属格目的語をとる接頭辞動詞の統語環境から調べてみることにする。この文献に見られた属格目的語をとる接頭辞動詞には次のような語がある。(現代語において対応する語形で表記。) なお、以下に引用する文例はすべて原文のままである。

be- : *bedanken*, *bedürfen*, *begeben*, *begehren*, *beladen*, *berichten*, *beschämen*,
besinnen

ent- : *entraten*, *entschlagen*

er- : *erinnern*, *erlassen*, *erwarten*

ver- : *vergessen*, *verständigen*, *verwundern*

ge- : *gebrauchen*, *gedenken*, *genießen*, *geschweigen*

1. 属格目的語→属格目的語

まずこの文献で、属格目的語をとる接頭辞動詞について見てみると次のような文例が挙げられる。

bedürfen:

- 1) Wer ewer bedarff / der wirdt euch wol finden vnd suchen / [...] (S.24)
 (あなた方を必要とするような人は、きっとあなた方を探し見つけることでしょう)
 (下線及び括弧は筆者)

この例ではbedürfenが人称代名詞ihrの属格ewerをとっており、このように属格が現れる例は7例中6例見つけたが、この用法は現代語においても衰退することなく維持されており、bedürfenに関しては目的語に変化は見られない。

begeben:

- 2) Aber in betrachtung / daß es vmb den gemeinen Nutze / [...] / zuthun
 gewesen / waren sie alle zumal willig / jhrer WeyBheit sich zubegeben
 [...] (S.31)
 (しかし大事なのは公共の利益であることを考えると、彼らはみな進んで自らの知恵を放棄した)

begebenは再帰動詞としてこの文献には11例現れているが、「(ある出来事が)起こる」という意味で用いられる場合が多く、属格を伴って「～を放棄する」という意味で使われているのは上例一つだけである。そして「放棄する」対象となるjhrer WeyBheitが属格で入っているが、属格目的語をもつ動詞によく見られるようにこの表現自体が現在ですでに雅語化してしまっている。

entraten:

- 3) Endlich kam es darzu / daß Fürsten vnd Herrn / so jhrer in kein weg
entrhaten können / nicht mehr wolten jhre Botschafften zu jhnen / sie
 umb Rhat anzusuchen / senden:[...] (S.16)
 (いよいよ彼らなしではやってゆけなくなった諸侯や貴族たちは、助言を求めるために彼らに使者を遣わすのが煩わしくなった)

Fürsten vnd Herrnを受ける主格の関係代名詞soに導かれる関係文の中でentrhatenは、「彼ら(ラーレ人)なしではやってゆけない」という意味を表現するために人称代名詞sie(ラーレ人たち)の属格jhrerをとっており、この用法は現代語でも存在するがすでに衰退し、雅語になっている。

entschlagen:

- 4) [...] / dz man sich wol jhrer nicht gantz vnd gar eins mals entschlüge
 vnnd abthete:[...] (S.29)

（一気に彼らから逃れ、全く手を引いてしまう）

ここでも「～から解放される」という意味のsich entschlagenは人称代名詞sieの属格jhrer（=frembder Herrn「異国の君主たち」）をとり、この用法は現代語では雅語もしくは古語として残っている。

gedenken:

5) Daß ich der Kinderzucht / vnnd andrer sachen / diß orts nit gedencke. (S.20)

（子供のしつけやその他のことについてここでは考えないことにする）

この文例でのgedenken（思う）は現代語と同様に属格目的語をとっており格支配に変化は見られないが、

6) [...] / lasset euch nit jrren / sonder gedencket an einen Dorn / der einem in den Fuß gehet. (S.100)

（勘違いなさいますな、足に刺さったとげをお考えください）

7) [...] : vnter anderm gedacht sie auch an jhren Kram den sie gen Marckt truge / [...] (S.116)

（とりわけ、彼女は市場へと持って行く品のことを考えた）

これらの文例でのgedenkenは、属格目的語の代わりにanを伴った前置詞格目的語をとっており、これは現代語の基礎動詞denkenの用法と同じである。このほかにもgedenkenにはaufの前置詞格目的語をとる用法も見られ⁴⁾、初期新高ドイツ語では前置詞格目的語をとっていたものが現代語では属格目的語をとるようになるという変化がここでは考えられる。

2. 属格目的語→前置詞格目的語

ここでは初期新高ドイツ語での属格目的語が現代語では前置詞格目的語に変わるという分類を見てみよう⁵⁾。

bedanken:

まずbedankenは文献全体の中で2回用いられており、そのうち属格目的語をとっているのは次の例である。

8) Dessn bedancket sich der Herr Schultheiß auffß höchste:[...] (S.79)

（村長はそれに大いに感謝した）

この例では、bedanken（礼を述べる）すべき対象物がdessnという指示代名詞の属格によって表現されているが、現代語ではこれがfürを伴った前置詞格目的語で表されるようになっており、属格目的語は現代語においてはもはや用いられない。また、これに対応する基礎動詞については次のような用法も見られた。

8') Der Keyser dancket jhm des freundlichen anerbietens / [...] (S.93)

(皇帝は彼の親切な申し出に感謝した)

ここでもdanken (感謝する) すべき対象が下線部のような属格で表されており、この部分には現代語ではfürの前置詞格が用いられる。このようにbedankenについては、接頭辞動詞と基礎動詞の双方に属格目的語から前置詞格目的語への変化が起こっていることが分かる。

beladen:

9) Darumb wurden sie rhates / [...] / bey einandern zu bleiben / vnnd frembder Geschefften sich gar nit / oder ja so wenig als jimmer möglich anzunehmen vnd zubeladen. (S.13)

(それ故に彼らは協議し、互いに寄り添ってこの地に留まり、他人事は一切引き受けず背負い込まないかあるいはできる限り減らそうとした)

beladenはこの文献の中では一例しか見当たらないが、ここでのbeladenは「背負い込む」目的語として属格のfrembder Geschefftenをとっており、この属格目的語はその前のannehmen (引き受ける) の目的語でもある。現代語のbeladen, annehmenにはともに対格の再帰代名詞をとる用法があるが、この再帰代名詞を伴って属格目的語をとる用法はannehmenにのみ雅語として残っているだけである。現代語のbeladenでは属格目的語に代わってmitを伴う前置詞格目的語が使われるようになってきている。また、基礎動詞laden単独で用いられている例はこの文献では見当たらなかったが、よく知られているように現代語のladenとbeladenとはKohle auf einen Wagen ladenとeinen Wagen mit Kohle beladen (車に石炭を積む) のような関係にあり、be-の作用によってWagen (車) が対格の目的語となり「車全体に積む」という意味が表現されるようになる⁶⁾。このように基礎動詞ではladen (積む) すべき「物」が対格目的語になるのに対しbe-動詞では「物」が初期新高ドイツ語においては属格、現代語では前置詞格によって表されるのである。

besinnen:

10) Doch besinnet er sich eines bessern / [...] (S.63)

(しかし彼は気を取り直した)

ここではbesinnenが属格目的語をとっているが現代語ではaufの前置詞格が用いられ、属格の用法は衰退しまれにしか用いられない。

erinnern:

11) Damaln erinnert er sich mit einem tieffen seufftzen seiner ersten WeyBheit / [...] (S.51)

(その時彼は深いため息をつきながら、かつて持っていた知恵のことを思い返した)

再帰動詞としてのerinnernについても、属格目的語をとる用法は雅語あるいは古語とされており、現代語の標準語では主にanを伴う前置詞格が用いられる⁷⁾。

verständigen:

12) [...] / jnmassen sie vns dessen berichtet vnd verständiget / [...] (S.105)

（彼らが余に伝え報告したところによると）

ここではverständigen（知らせる）する相手が「人」の対格（vns）で、そしてその内容が属格指示代名詞dessenで表現されており、これが現代語においてはvonあるいはüberの前置詞格に変化している。

verwundern:

13) Solcher Antwort verwundert ich mich nicht wenig / [...] (S.7)

（その答えに私は少なからず驚いた）

verwundernはここではsolcher Antwortという属格の目的語をとっており、これが現代語になるとüber solche Antwortという前置詞格目的語で表現されるようになる。そしてこの属格をとる用法は現代語では古風な表現としてももはや残ってはいない。

geschweigen:

14) Aber (sprach er) ich wil der Stegen geschweigen / [...] (S.54 f.)

（しかし（と彼は言った）階段のことは言わないことにしよう）

ここでder Stegenとはテキストの注釈ではStiegen（狭くて急な木の階段Stiegeの複数）となっており、つまりこの場合geschweigenは複数属格の目的語をとっていることになる。現代語では前置詞格も用いられ、属格をとる用法も見られるが、geschweigenという語自体が衰退し今日ではほとんど使われなくなっている。

3. 属格目的語→対格目的語

次に、対格目的語への変化に目を向けてみる。まず接頭辞には文法的作用として基礎動詞を他動詞化するという働きがある。例えば、「答える」という意味のantwortenは、auf einen Brief antworten → einen Brief beantworten（手紙の返事を出す）、また steigen（登る）では、auf einen Berg steigen → einen Berg besteigen（山に登る）あるいはeinen Berg ersteigen（山の頂上まで登りつめる）といったように、接頭辞のbe-やer-を付加することによって、自動詞として前置詞格目的語をとっていた基礎動詞が対格目的語をとる他動詞に変化するのである。そしてこの対格目的語が初期新高ドイツ語では属格で表されている場合が多い。そこでこの分類では、接頭辞動詞がとる目的語の、属格から対格への変化を調べてみることにする。

begehren:

15) [...] / daB je eins des andern begeret / [...] (S.20)

（誰もが相手を求める）

この文献中にbegehrenは20例あり、属格目的語が現れたのは上の一例のみであるが、現

代語では対格目的語をとるようになっており、属格は雅語としてまれにしか用いられない。
berichten:

16) [...] / jnmassen sie vns dessen berichtet vnd verstendiget / [...] (S.105)

(彼らが余に伝え報告したところによると)

ここでberichtenは、報告する相手(vns)を対格で、そして報告する内容(dessen)を属格でとっているが、現代語ではこれらの格関係が変わり、報告相手が与格、報告内容が対格で表されるようになっており、事物を表す目的語の、属格から対格への変化が見て取れる。また、この文例では行為の対象となる「人」(vns)が対格で表現されているのだが、be-動詞が「人」を対格目的語として要求するというのは官庁語によく見られるような現代ドイツ語の特徴であり、この特徴が16世紀の文献にも見られたということになる。

erlassen:

17) [...] / ob man sie etwann deß abforderns erliesse / [...] (S.104)

(もし彼らが国外への召喚を免れるのならば)

ここではerlassenが、免除する相手の「人(sie)」を対格で、免除すべき内容(deß abforderns)を属格でとっており、これが現代語では「人の与格」と「物の対格」へと変化する。ここでも動作の対象となる事物は時の流れとともに属格から対格へと変換されていくのだが、「人」を表す目的語はberichtenと同様に対格であり、これが与格へと変化したことは、「人」に当てられていた焦点が「事物」へと移行したことを意味しているものと思われ、また与格が「人」を表現するための典型的な格であることを考え合わせれば、こういった変化は自然な流れであると言える。

erwarten:

18) Man solte viel mehr der zeit erwarten / daß [...] (S.68)

(むしろ時を待つべきであろう)

erwartenは「待つ」対象の目的語としてここではder zeit(時)を属格でとっている。erwartenが属格目的語をとる例はこの他にも1例、関係代名詞の属格(dessen)をとるものが見つかったが、これらの属格目的語は現代語では対格目的語に変換されている。ここで基礎動詞のwartenについて考えてみると、次のような用法が2例見出された。

'18) Geht jr nur fort (sprach er) hineyn / vnd wartet mein / [...] (S.97)

(さあ、中へ入って(と彼は言った)私を待っていて下さい)

ここでは基礎動詞wartenが、目的語として人称代名詞ichの属格mein(現代語ではmeiner)をとっており、さらに別の例でも属格人称代名詞seinをとるものが見つまっている。ここで、接頭辞動詞erwartenとその基礎動詞wartenのそれぞれの時代的变化を較べてみると、erwarten, wartenともに初期新高ドイツ語では同じ属格目的語をとっていたものが、現代語ではerwartenは対格目的語を、wartenはaufを伴う前置詞格目的語をと

るといように異なった変化を示している。この現象は、接頭辞er-の作用により *erwarten* の属格目的語が対格化されたものと考えられるのではないだろうか。

vergessen:

- 19) [...] : *siehe zu / da hatten sie deß Ofens vergessen / auch nit raum gelassen / [...]* (S.54)

(ご覧あれ、彼らは暖炉を忘れていたのみならず、そのスペースすら空けておかなかったのだ)

*vergessen*はこの文献中に12例用いられ、そのうち属格目的語をとっているものは4例あるが、上の文例では*vergessen*は目的語として属格の*deß Ofens*をとっている。この属格の用法は現代語では雅語としてのみ残っており、また南部方言として*auf*や*an*を伴った前置詞格目的語をとる用法も現代語には見られるが、一般化しているのは対格で表現された目的語であって、ここにも接頭辞*ver-*の対格化作用が影響しているように思われる。

gebrauchen:

- 20) [...] / *damit man sich jhres Rhates gebrauchen könne: [...]* (S.29)

(彼らの助言を利用することができるために)

ここでの*gebrauchen*は「用いる、利用する」対象として属格の*jhres Rhates*（彼らの助言）をとっているが、現代語の*gebrauchen*には対格目的語をとる他動詞の用法しかなく、また基礎動詞*brauchen*については、

- '20) [...] : *sonder es begeret jeder der Lalen einen selberst persönlich bey sich am Hofe vnd an seiner Tafeln zuhaben / damit er sich desselbigen zu fürfallenden Geschäfte tiglich brauchen / [...]* könnte. (S.16)

(誰もが自らラーレ人の一人を宮廷や食卓で個人的に側に置きたいと考えた。次々と起こる用事にそのラーレ人を日々利用できるようにである)

このように*brauchen*が属格の*desselbigen*（一人のラーレ人）をとる用法も見られ、*gebrauchen*, *brauchen*ともに属格目的語をこのテキストではとっているのだが、これが現代語になると、*brauchen*にはまれにはあるが自動詞として属格目的語をとる用法を残しているのに対し、*gebrauchen*には対格目的語をとる用法しかない。こういったことから接頭辞が対格化作用をもっているということが考えられる。

genießen:

- 21) [...] / *wann jr daheymen zu hauß / [...] / in guter Freyheit / Ruhe vnd Frieden / lebeten / der Früchten ewerer Gütern geniessen theten / [...]* (S.24)

(もしあなたが家にいて、有り余る自由と安らぎのうちに暮らし、大地の実りを十分に満喫するならば)

このgenießen（享受する）もここでは目的語に属格をとっているがこの用法は現代語では衰退し、対格目的語をとる他動詞へと移行している。

4. その他

ここでは、属格目的語をとってはいるがこれまで述べてきた変化のどこにも属さないものの例を一つだけ挙げておくことにする。

beschämen:

22) Dasselbsten kauffet er gewiBlich einen stattlichen Beltz auffs Dorff hinauB/
dessen sich auch ein Fraw Schultheissin in der Statt nicht hette beschämen
dörffen / denselbigen zutragen. (S.79)

(実際にそこで彼はすばらしい毛皮のコートを買って村へ帰った。それを着れば、村長夫人もコートのことですで町で恥ずかしい思いをせずに済んだであろう)

ここに現れたbeschämenは再帰動詞として属格目的語dessen（Beltzを受ける関係代名詞の属格）をとり、sich dessen beschämen（～を恥ずかしく思う）という用いられ方をしているが、現代語のbeschämenには再帰用法はなく、対格目的語をとる他動詞として「恥じ入らせる、恐縮させる」という意味を表すようになっており、テキストのbeschämenとは意味的にも幾分ずれが生じている。そのためbeschämenの属格目的語に対応するものを現代語のbeschämenに見出すのは困難であるが、こういったbeschämenの属格目的語を伴った再帰用法は現代語ではむしろ基礎動詞のschämenに受け継がれており、schämenでは属格目的語のほかにさらに前置詞格目的語（この場合はwegen, für）による表現も可能となっている。このように、文例6）、7）のgedenkenと同様、初期新高ドイツ語での接頭辞動詞の格関係が、現代語ではそれぞれの基礎動詞において実現されているという現象は興味深い。

III. おわりに

以上、初期新高ドイツ語民衆本Das Lalebuchの中で用いられた接頭辞動詞の属格目的語が、現代語においてはどのように表現されているのかを見てきたわけだが、属格目的語がそのまま現代語においても受け継がれているもの、あるいは前置詞格目的語、対格目的語へと変化していったものという分類が可能であった。ここで接頭辞の作用ということを考えてみると、この分類で、属格目的語が前置詞格目的語へと変化したパターンについては、例えば基礎動詞wartenの属格目的語→前置詞格目的語という変化もあるように、必ずしも接頭辞の影響があったとは言えないが、同じく属格目的語をもつ接頭辞動詞erwartenでは属格目的語→対格目的語となり、属格目的語が現代語において対格目的語へと変化したものについては、動詞接頭辞の対格化作用が関与しているものと思われる。

[注]

- 1) Flämig, W.: Grammatik des Deutschen. Einführung in Struktur- und Wirkungszusammenhänge. Berlin 1991. S.146.
- 2) 動詞の支配格としての属格は現代語では衰退しているが、これは現代語における属格の減少を意味しているのではなく、属格は語尾-ungにより造語される動詞的抽象名詞において付加語的に多く用いられ (die Unterzeichnung des Vertrages)、また新たに形成された前置詞 (entsprechend, ungeachtet, dank, kraft, mittels) も属格を支配しているという指摘もある。(Paul / Wiehl / Grosse: Mittelhochdeutsche Grammatik. 23. Aufl. Tübingen 1989. S.341.)
- 3) Das Lalebuch. Nach dem Druck von 1597. Hrsg.v.Stefan Ertz. Stuttgart 1970, 1982. (Reclam Nr.6642) (大沢峯雄 訳:「ラーレ人物語」国書刊行会 1987.)
- 4) [...] / daß sie nur allein darauff gedencken / [...] (S.81) (女性たちはただそのことばかりを考える)
- 5) この文献には、再帰動詞 begehen が mit の前置詞格をとり「～で生活する」という用いられ方をしていいる箇所があるが、中高ドイツ語の begän ではこの前置詞格が属格で表現されており、中高ドイツ語から初期新高ドイツ語への移行の際にも、属格→前置詞格へという変化が起こったものと思われる。
- 6) 川島淳夫 (編集主幹) 他:「ドイツ言語学事典」紀伊国屋書店 1994. S.23.
- 7) スイス、オーストリアでは、sich auf～ erinnern という用法もある。

[参考文献]

- Ebert / Reichmann / Solms / Wegera: Frühneuhochdeutsche Grammatik. Tübingen 1993.
 Hentschel, E. / Weydt, H.: Handbuch der deutschen Grammatik. 2. Aufl. Berlin 1994.
 Lexer, M.: Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch. 38. Aufl. Stuttgart 1992.
 Paul, H.: Deutsche Grammatik. Band III. Tübingen 1919.
 Wilmanns, W.: Deutsche Grammatik. Dritte Abteilung: Flexion. Straßburg 1906.
- 拙稿:「初期新高ドイツ語民衆本 Das Lalebuch における Präfixverben について」
 阪神ドイツ語学研究会編:「会誌10号」1998. S.49-63.
- 新保雅浩:「古高ドイツ語動詞の格支配 —前置詞格目的語と属格目的語をめぐって—」
 千石、川島、新田編:「ドイツ語学研究2」クロノス 1994. S.393-420.